青年と少女のマルチプル・オンライン
memory of Edy

グラハムandエディ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

このお話は、☒青年と少女のマルチプル・オンライン☒のエディ（咲月）視点です。

本編では語られていない会話や、エディの心情を見ることができます。

話数は本編に合わせているので『？』となることがあるかもしれません。ご了承お願いします。

目次

第1章　恋する少女
第1話「青年への好意」――1
第2話「私が助ける番」――7
第3話「君に想いを」――12
第4話「まさかのライバル」――17
第5話「ＳＡＯでの出来事」――25
第6話＋第7話「君の傷ついた姿」
33
第2章　スクワッドのお誘い
第8話「ネームドエネミー」――37
第9話「私の恋の話」――43
第9．5話「強者」――51
第10話「勝つのは」――55
第11話「あと一息」――62
第3章　再び彼を壊される
第12話「とある日の私達」――69
第13話「皆と外食」――78
第14話「戦い」――84
第15話「大丈夫？」――88

第1章　恋する少女

第1話「青年への好意」

これは、青年を想っている1人の少女の物語…

放課後…

女子生徒「咲月ちゃん、また明日ね～！」
咲月「うん！また明日ね～！」
私は☒織月　咲月（せんげつ　さつき）☒、普通の高校生。
実は私には、好きな人がいる。その人は、今私の前を歩いてる人。
咲月「あ～すと♪」
明日人「あ、おかえり、咲月」
咲月「一緒に帰ろ～」
彼は☒織月　明日人（せんげつ　あすと）☒、私と同学年。
実は私達は、血の繋がっていない【義兄妹】。何故血が繋がっていないのか？それは、

数年前…

私は幼い頃、捨て子だったの。なんで捨てられたかは分からないけど、多分家族関係が崩壊していたからなのかな？捨てられた日は雨だったから風邪を引いてコンクリートの上で倒れていたわ。

その時に助けてくれたのが明日人なの。明日人が私に気づいてくれなかったら死んでたかもしれない。それから私は明日人と一緒に暮らしたの。

日が経つにつれて明日人のことが好きになった。いつか本当の想いを伝えたいな。

自宅…

明日人「ただいま～」

咲月　「今日も2人は仕事ね」

私達の親は2人共銀行で働いていて、帰っても家に誰も家にいないことが多い。

咲月　「はぁ～、今日も暑かったね～」

ヌギヌギ…

明日人「自室で着替えなよ、、、」

照れてるわね。一緒に暮らしてきたのにまだ恥ずかしいのかしら。

咲月「いいじゃない、２人だけだし。それより今日は何処へ行くの？」

明日人「えっと、ＧＢＭかな」

咲月「分かったわ、あとで私もログインするわね」

明日人「あぁ」

返事をすると明日人は自室へ入って行った。

咲月「明日人を見るとどうしてもドキドキしちゃう、、、あ、早くＧＢＭにログインしなきゃ」

ログイン…

さぁ、仮想世界にログインできたわね。この世界での私のユーザーネームは☒エディエーカー☒なの。あ、明日人を見つけた。

エディ「グラハム～！」

明日人のユーザーネームは☒グラハムエーカー☒。さすがガンダム好きって感じね。

あまり人のこと言えないけど。
グラハム「やぁ咲、、じゃなかった、エディ」
エディ「さっ、行こ♪」
手を繋いじゃおっと。
ギュ…
グラハム「、、、」
エディ「どうしたの?」
グラハム「あ、いや!何でもないよ!」
エディ「そう?」
その後、2人は数時間一緒に遊んだ。
グラハム「そろそろ落ちるか」
エディ「そうね、もうすぐ夕飯だからね」
グラハム「それじゃ、また向こう（現実）で」
エディ「うん、じゃあね～」

ログアウト中…

さて、夕飯を作ってあげなきゃ！
数分後…
咲月「いただきま～す♪」
明日人「いただきます」
咲月「美味しい？」
明日人「うん、とても美味しいよ」
咲月「えへへ♪」
喜んでもらえて嬉しいな。また作ってあげたくなる。

数時間後…

咲月「おやすみ～」
明日人「あぁ、おやすみ」
咲月「私、明日の朝は部活でいないからね」
明日人「分かった」
明日も忙しい1日になりそう。

咲月　（おやすみ、ずっと一緒にいられるといいな）

第2話「私が助ける番」

朝6時、学校にて…

女子生徒A「咲月ちゃんのスマッシュキレイだね！」
咲月「えへへ♪ありがとう！」
女子生徒B「中学校で頑張ったんだろうね～」
咲月「いやいや、テニスを始めたのは今年が初めてだよ（笑）」
女子生徒A「え！そうなの!?」
女子生徒B「テニスの素質が高い！」
顧問「よし、朝練終わりだ」
咲月「はい！」

放課後…
やっと1日が終わった～。本当は朝練なんてしたくないんだけどなぁ。あ、明日人がいる。

咲月　「明日人～！」
明日人「やぁ咲月、今日もお疲れ様」
咲月　「明日人もお疲れ様～」
フフフ♪今日も明日人と一緒に帰れるなんて。
ん？明日人、悩んでる？
咲月　「明日人、どうかした？」
明日人「あ、ごめん、考え事してた」
明日人が考え事なんて珍しい。もしかして辛いこととかある？
咲月　「そうなんだ。何か困ってたら私に言ってね！」
明日人「分かったよ。咲月もなんかあったら言うんだぞ」
咲月　「…ええ、ありがとう」
明日人が好きですとか今言える訳ないよね、、、言いたくても言えないというか。

帰宅…

明日人「は～、頭痛がする。自室で寝込んでくる」
咲月　「大丈夫？あとで薬持っていくわよ」

明日人「うん、ありがとう」
そう言って明日人は自室に戻っていった。
日頃の疲れが出てきたのかな?

数分後…
咲月「明日人、大丈夫かしら、、、」
ガチャ
咲月（薬を持ってきたけど、眠ってるわね）
咲月は薬を机に置く。
咲月（、、、）
すると咲月は明日人に顔を近づけた。
咲月（そういえば、以前（捨てられた時）私が風邪を引いた時、明日人が看病してくれたわね。ありがとう、今度は私があなたを看病してあげるわ。）
チュッ…
咲月は明日人の頬にキスをし、部屋を出た。
咲月（明日人にキスしちゃった♪なんだか私が元気になってきたわね）

数時間後…

明日人が部屋から出てきた。
咲月「あら、頭痛は治ったかしら?」
明日人「うん、咲月が持ってきてくれた薬のおかげでね」
咲月「良かった♪さ、ご飯食べよ!」
元気そうで良かった。さてと、、、
咲月「ねぇ明日人、良かったら明日、２人で何処かに出かけない?」
明日人「うん、いいよ。看病してもらったし」
咲月「ありがとう、フフフ♪明日人とデートの約束しちゃった?」
明日人「で、デート、、」
やった〜!明日人と一緒にお出かけだ!

お風呂…

咲月（私は明日人が好き。でも明日人は私のことどう思ってるんだろ、、片思いだったとしてもずっと傍にいたいな、、）

私はいつまでも、あなたのアンジェルースでいたい。

第３話「君に想いを」

咲月　（フンフフーン♪明日人とお出かけ～♪）
遂に明日人とお出かけに行く。早く支度しなきゃ！
咲月　「お待たせ！」
明日人「うん、行こうか」
咲月　「うん！」
こうして２人だけで買い物に行くっていつぶりだろう。

デパートに到着…

明日人「荷物は俺が持つよ」
咲月　「本当!?じゃあ沢山買うわね♪」
やった～、明日人が荷物持ちしてくれる♪あ、帰りは電車だからあまり買わない方がいいのかな?まぁなんとかなるよね。

ある店の前…

この店、可愛らしいぬいぐるみ売ってるじゃない！値段は、、５０００円って高いわね。あ、明日人なら買ってくれるよね？

咲月「ねぇねぇ♪これ買ってくれる？」

明日人「ん？どれどれ、、」

すごい悩んでる、、こうなれば！

咲月「いい？お兄ちゃん、、」

数分後…

店員「ありがとうございました～」

咲月「へへへ♪ありがとう、明日人お兄ちゃん♪」

秘儀、【お兄ちゃん】と呼べば必ず買ってくれる説！、、、そんなことないわね。でも買ってくれたわ♪

明日人「どういたしまして、咲月にはいつも感謝してるからな」

咲月「私こそいつも感謝してるんだからね♪私も何か奢るわよ？」

明日人「いや、女の子に奢ってもらうのは申し訳ないから大丈夫だよ」
本当に明日人は優しいな。こうしてまた好きになっていく。

数時間後、帰り道…

私の手に持ってるものは自分の鞄と買ってもらったぬいぐるみ、明日人は大量の服やら食品やら。なんかすごく申し訳無いわ、、、
咲月「沢山買ったわね～、私も持つわよ？」
明日人「もうすぐ家に着くし大丈夫だよ、咲月はぬいぐるみを持ってて」
ガチャ…
明日人「ただいま～」
咲月「ただいま～♪」
明日人「ふぅ、もう７時か、晩御飯は食べたし風呂に入ってＧＧＯ内で睡眠しようかな」
咲月「私もそうするわ」
風呂…
今日、明日人はＧＧＯで寝る。つまり今日こそは告白したい。ちゃんと伝えられるか

な。

数分後、グラハムのホーム…

エディ「グラハム、起きてる?」
グラハム「!エディか、どうした?」
落ち着け、落ち着け私、、、
エディ「えぇっと、ベッドの隣、いいかしら?」
グラハム「うん、、え?」

ベッドの上…

グラハム、なんて言ってくるかな。
エディ「今日は色々とありがとうね、楽しかったわ」
グラハム「そう言ってもらえて良かったよ、俺も楽しかったよ」
エディ「良かった、、、ねぇ、私のこと頼りにしてる?」
グラハム「あぁもちろん、エディが傍にいてくれて嬉しいからね」
エディ「、、、」

頑張れ私、言うのよ、、、
エディ「じゃ、じゃあ、私のこと、、、好き？」
グラハム「！お、おぅ、好きだよ、家族だからね」
家族だからとかじゃなくて、その、、、
エディ「私達、【義兄妹】って言うんでしょ？つ、付き合って欲しいの、、、」
さ、さぁ、グラハムの返事は、、、
エディ「だ、だめ、、、？」
グラハム「い、いいよ」
や、やった！
エディ「、、エヘヘ♪モヤモヤが晴れた♪」
ギュ…
エディは１滴の涙を流し、グラハムに抱きついた。
グラハム「エディ、これからもｙ、、、あ」
エディ「どうしたの？、、、あ」
グラハム「あ、アファシス、、、」
アファシス「え、えっと、、、おめでとうございます、マスター」
アファシスに見られてた、、、

第4話「まさかのライバル」

翌朝のリビング…
咲月　「えへへ♪頑張って告白したかいがあったな～♪」
今、咲月はルンルンで朝食の準備をしている。今までにない幸福感だからだ。
ガチャ

きたきた、私の明日人が♪
明日人「おはよう」
咲月　「おはよ～！」
ムギュ！
明日人「おわ！」
バタン！
あ、勢いよく飛びついたから押し倒しちゃった。
明日人「いてて、、大丈夫か？」
咲月　「私は大丈夫！でも、明日人は本当に優しいわね、自分のことより私に気を使っ

てくれるもの。そんな明日人が大好き♪」
咲月「ハハ、ありがとう」
咲月「さぁ、早く食べて一緒にどこかへ行こう?」
明日人「もちろん」
貴方をいつまでもずっと愛してあげるわ。

GGOにログイン…
エディ「お待たせ〜、待った?」
グラハム「いや、俺も今ログインしたところだから大丈夫だよ。総督府に行こうか」
エディ「うん♪」
あぁ、ずっと2人っきりでいたいな〜と思ったのも束の間、ホームを出るとクレハがいた。クレハはグラハムと幼馴染だったかしら。
クレハ「あら、グラハムじゃない!」
グラハム「お、クレハだ。良かったら一緒にイベント行くか?」
クレハ「良いわね!行きましょ!」
本当はグラハムと2人っきりが良かのにな〜、でも仕方ないわね。

エネミー狩り中…

エディ「やるわねグラハム、何だかまたドキドキしてきた、、、」
戦闘中に別のドキドキを感じてるって何やってんだろ私。
クレハ「あら、グラハムに見惚れてたの？」
エディ「く、クレハ、聞いてたのね」
クレハ「分かるわ～、私もグラハムを見てたら何故かドキドキするもの。今度グラハムとデートしようかな～」
そ、それはダメ！なんとかしなきゃ！
エディ「ぐ、グラハムは私のものなの！」
クレハ「あら、その発言をしたってことはもしかして2人は付き合ってるの？まぁ、義兄妹って聞いたことあるから変な感じはしないけど」
く、墓穴掘った。
エディ「と、とにかくグラハムは渡さないから！」
クレハ「それじゃ、グラハムとの自慢話をしようかな～」
じ、自慢話？きっと大した事ないわよ、うん。
クレハ「私はグラハムとキスしたことあるわよ？」

エディ「なっ!?」
え、嘘でしょ!?私はしたことないのに!グラハムはあとで死刑ね。とにかく私も対抗しなきゃ!
エディ「わ、私はグラハムにいつも手料理を出してるわよ!」
クレハ「へ〜、まぁ私は2回もキスしたけど」
はいグラハム処刑。私の見てない間に何してるのよ!でもグラハムがそんなことするとは考えにくい。もしかして、ただの言いがかりか無理矢理キスしたか。
エディ「わ、私なんか、今もグラハムと一緒にお風呂に入ってるんだから!」
クレハ「なんですって!?」
ふふ〜ん、どうだ!思いっきり嘘だけど。
クレハ「こうなったら、、、最後の手段を出すしかないわね」
諦めてほしいんだけど、、、
クレハ「それは、私とエディ、グラハムの3人でダブルデートをするのよ!」
諦めるという選択肢はないのね。ここで断るときっと「逃げるの?」とか言ってきそうね。
エディ「へぇ〜、面白そうじゃない。乗るわ!」
面白そうではないけどこう言っておこ。

クレハ「そうと決まれば、グラハムの元へ戻るわよ！」
エディ「そうね」
クレハ「グラハムー！」
グラハム「な、なんだ？」
クレハ「今から私とエディの手を繋いでもらうから」
グラハム「ふぇ？」
そりゃあグラハムもそんな反応するわよ、、、

そしてイベントクエストが終わりホームへ…

グラハム「あの、、いつまで繋ぐつもり？」
エディ「ホームに戻るまで♪」
クレハ「まぁ、あと少しだから。そう言ってる間に着いたわ」
グラハム「あ、本当だ」
昼食だから1回ログアウトしなきゃね。
グラハム「2人共、今日は一緒にイベント攻略してくれてありがとな」
エディ「楽しかったね♪」

クレハ「あたしも楽しかったわ♪ねぇグラハム、こっち向いて？」
グラハム「何？」
チュッ
グラハム「！」
エディ「わ、私の目の前で、、、」
そしてクレハが私をチラッと見た後
ペロッ
なっ!?一瞬舌を入れたの!?
クレハ「、、、ふぅ、次もよろしくね！」
グラハム「あ、あぁ、またな」
ム～、クレハ許さない。

グラハムのホーム…

エディ「さぁ、説教ね」
グラハム「は、はい、、、」
エディ「クレハとのキス、今回で3回目じゃない？」

グラハム「はい、、」
エディ「何故断らなかったの？」
グラハム「すいません、断る勇気がありませんでした、、」
グラハムのことだからさすがに断る勇気がなかったか、、
エディ「罰は、、リアルで考えるわ」
グラハム「分かりました、、」
エディ「さぁ、ログアウトしましょう？」
グラハム「はい、、」

ログアウト中…

なんか説教中グラハムの返答がほぼ「はい」だったわね。さぁ、グラハムの部屋に行かなきゃ。
ガチャ
咲月「覚悟しなさいよ」
明日人（あ、終わった）
咲月「目を瞑りなさい！」

明日人「ヒィ！」
咲月「、、、」
フフ♪かわいい、私が殴る訳ないのに。
チュッ…
明日人「ん!?」
チュッ、チュッ…
グラハム（な、長い、、、）
咲月「ぷはっ！ハァ、、、ハァ、、」
明日人「ハァ、、、ハァ、、、」
咲月「罰は、、明日人のファーストキスを取る、、」
さすがにリアルでは明日人は誰ともしてないでしょ。何はともあれ、明日人の初キスゲット♪
咲月「、、次の罰も考えておくからね♪」
明日人「う、うん、、、」
これからも覚悟してるんだよ?

第5話「ＳＡＯでの出来事」

放課後…
明日人と付き合い初めて数日が経つ。
ここ数日ずっと明日人と一緒に寝てるから快眠なのよね～♪あ、明日人ったらまた1人で帰ってる。あそこの道の周りに人もいなさそうだから、仕掛けてみよっかな。
咲月「明日人～！」
明日人「よ、咲ｋ、、」
えいっ♪
チュッ
咲月は明日人の頬にキスをした。
明日人「！な、なぁ、今外だぞ。見られるぞ、、」
咲月「バレないバレない♪ねぇねぇ、早く帰って一緒に遊ぼ！」
明日人「わ、分かったよ」

帰宅し、咲月の部屋…

咲月「確かＳＡＯにログインするって言ってたわね、新しいイベントはどんなのかしら」

ログイン…

よし、ログインできた。グラハムは、、、いたいた。

エディ「グラハム、今日は何をする？」

グラハム「そうだな、、今回もイベントクエストをするとしようかな」

エネミー狩り中…

グラハム「シャープネイル！」

エディ「ヴォーパルストライク！」

言うまでもなく、私とグラハムの連携は息ぴったりね♪、、ん？グラハムがなんか不思議そうにしてるわね。

エディ「どうしたの？」

グラハム「なんか、ミシックアイテムがドロップした」
エディ「へぇ～、おめでとう！なんていうアイテム？」
グラハム「えっと、【システム外スキル習得結晶】、つぶやくとシステム外スキルを自分で作り出すことが可能になる、、、え、ヤバくね？」
エディ「そ、そんなチートアイテム聞いたことないわね」
普通のエネミーからドロップするなんて、、、てことはかなり低確率なアイテムをグラハムは引き当てたのかもしれないわね。
グラハム「結晶だから消費アイテムかな？使ってみよ」
どんなスキルにするのかしら。
グラハム「太陽炉で空を飛びたい」
太陽炉って、まさかＧＮドライブ!?
ピカッ
するとグラハムの足元が輝き出した。
綺麗な光、、、イルミネーションみたい。
シュン…
あれ、もう光が消えた。
エディ「終わり、かな？外見は特に変わってないわね」

グラハム「もう飛べるかな？」
フワッ
グラハム「おぉ、飛んだ！自分の意思で飛べそう」
エディ「凄いわね！太陽炉を手に入れたってことは、オリジナルのソードスキルもいくつかあるんじゃない？」
グラハム「確かに、イベントボスで試してみるとするか」
羨ましい、私もゲットしたいな～。

ボス戦…

２人は剣持ちのボスで腕試しをしている。
エディ「く、パリイで精一杯ね、、」
その時、粒子ビームが飛んできた。
パシュ！パシュ！
エディ「射撃!?」
グラハム「凄いな、剣を相手に向けると射撃するぞ。今だエディ、ラストアタックを！」

エディ「はぁぁ!サベージ・フルクラム!」
3連撃がボスに命中し、見事撃破した。

第一層、転移門広場…

エディ「お疲れ様♪さすが太陽炉ね、デメリットとかないの?」
グラハム「ん~、特に無いのかな?一定で飛べなくなるっていうこともないし。あ、でも弓を使うとき狙いが定まりにくいかな。あまり弓は使わないけど」
エディ「太陽炉のおかげで射撃もできるしね」
すると突然、男がグラハムに近づいて来た。なんなのこの人、グラハムのフレンドじゃないだろうし。
男性「おい、さっきの戦闘見てたぜ!どうやって飛べたんだ?」
グラハム「低確率でドロップしたミシックアイテムで飛べたんだ。今やってるイベントのエネミーを倒してたらドロップした」
言っちゃうんだ。あ、言わなきゃチートを疑わちゃうか。
男性「低確率か、なぁそれくれないか?欲しいものがあったらくれてやる!」
グラハム「悪いが。このアイテムは渡せないな」

男性　「ほう、なら勝負だ。お前が負けたらくれよな」
うわ、賭けをしてくる人なんて嫌い。自分勝手だもの。グラハムはなんて言うのかしら。
グラハム「、、、まぁいいだろう。それじゃ、【原始の草原】でデュエルな」
男性　「おうよ！」
引き受けるのね。
エディ「大丈夫なの？」
グラハム「あぁ、大丈夫だよ。いざとなったら空を飛ぶよ」
確かに、飛べるなら大丈夫かな。

原始の草原…

グラハム「さぁ、デュエルをしようか」
男性　「この世界は現実で死ぬことはないからな。ＨＰを全焼させることが勝利条件としよう」
エディ（勝ってね、明日人、、、）
３、２、１、ＳＴＡＲＴ！

始まった。私の場所からだと剣の交える音しか聞こえないわね。
ヒュン、カキンッ！
グラハムはバク宙からの斬撃を仕掛けた。
あれ、確かにグラハムの技術力は高いけど、バク宙から攻撃を仕掛けることなんてできたの？
カキンッ！
グラハムは剣で男性を突き放した。そして休む間もなく剣を男性へ向け出した。
パシュ！パシュ！パシュ！
うんうん、射撃もちゃんと有効活用してるわね。
カキンッ！カキンッ！
男性のＨＰが徐々に減っていき、レッドゾーンに到達した。
ソードスキルでトドメね。えっと、７連撃技だから、デッドリー・シンズだったかな。
ザクッ！
グラハムの勝利！当然の結果だよね！
エディ「お疲れ様！」
グラハム「ありがとう、広場に戻って飯にするか」
エディ「うん♪」

エディはグラハムの後を歩く。その時、エディは何かを感じ取った。
エディ（？誰かに見られてた気が、、、気のせいかしら？）

第6話＋第7話「君の傷ついた姿」

はぁ、、今日も部活疲れた～。休日なんだから休みにしてくれたっていいのに。でもこれでやっと明日人の声が聞ける♪

咲月「ただいま～！」

明日人「お、おかえり、、」

しかしその声は今にも消えそうな声だった。明日人の体はとても傷ついている。

咲月「！ど、どうしたのその目！黒目の色が薄い！」

明日人「実は、、ＶＲ内の、犯罪者に遭遇して、、、」

咲月「そうだったのね、、全く、私のいない間に危険なことを」

明日人「あれは不可抗力だったから仕方ないよ」

咲月「そ、そうね。とりあえず、病院行くわよ」

明日人「病院、か、、」

病院にて…

医師「これは、、、残念ですが、左目は今の技術では治せそうにありません。でも、右脚と左腕はしばらくすると回復するはずです。右脚は歩くと痛いと聞いたので補助具を貸しますね」

明日人「はい、ありがとうございます」

明日人の左目、回復できそうにないのね。なんだか私まで悲しくなってきた。

帰り道…

明日人「まさか俺が補助具を着ける時が来るなんてな、、」

咲月「歩きづらそうね、、」

私が支えてあげたいけど、それで明日人の邪魔になったら申し訳ないし、、。手を繋いであげればいいかしら?

ギュ…

明日人「咲月?」

咲月「歩きづらそうだったから、少しでも支えられたらなって思ったの、、」

明日人「ありがとう、脚も気分も楽になったよ」
良かった！役に立てたみたい！

翌日…

明日人の調子は大丈夫かしら、、見に行ってみようかな。
コンコン…
咲月「明日人、入っていい？」
明日人「いいよ」
ガチャ
咲月「義足の使い心地はどう？」
明日人「あまり良くないね、、でも、痛みは引いてきたからもうすぐ1人で歩けるようになると思う」
咲月「そうなのね。、、ねぇ、抱いていい？」
明日人「、、うん、もちろん」
ギュ…
咲月は、自分が気持ちいっぱいにしていることを明日人に話す。

咲月「あの時、傍にいてなくてごめんね。私が傍にいていれば義足なんて付けてないでしょうし」
明日人「咲月が悪いんじゃないよ。不可抗力だ。それに、咲月は朝から学校だったんだし」
咲月「うん、それでも、、」
咲月は涙をこぼす。
咲月「何故か☒ごめんね☒って言わないと気が済まないの、、」
明日人「咲月、、」
ギュ…
すると明日人は泣いている私を強く抱きしめてくれた。
明日人「俺は大丈夫だよ、それに今こうして傍にいてくれてるんだから」
咲月「明日人、、大好き、、」
あぁ、君が優しくしてくれるから、私は生きていけるんだよ♡

第2章　スクワッドのお誘い
第8話「ネームドエネミー」

あれから数日後…

そろそろ明日人の体の調子は良くなってるかな？
そう思いながら今日も咲月は明日人の部屋へ向かう。
ガチャ
あ、ノック忘れた。でも明日人なら気にしないはず、、。
咲月「おはよう明日人。あら、1人で立てたのね！」
明日人「うん、なんとかね。左目はまだダメだけど」
咲月「そう、、でも歩けるようになって良かったわ」
明日人「そうだね」

数時間後、ＳＡＯにログイン…

今日も明日人と一緒に遊ぶぞ～♪今日のログインボーナスは何かしら。
あら、『疑似太陽炉』だわ。明日人の太陽炉とはまた別の性能なのかしら。、、、あ、明日人見っけ♪
エディ「グラハム、今日のログインボーナス見た？」
グラハム「あぁ、『疑似太陽炉』だね」
エディ「疑似太陽炉を使うの楽しみだな～。ねぇ、飛び方教えて！」
グラハム「そうだった、エディは初めてだったな。分かった、教えるよ。そうだな、、、まずは人気のない場所で練習した方がいいな。そうと決まれば、、、」
エディ「きゃ！」
グラハムはエディをお姫様抱っこした。
ここだと人目が、、、でもすごく嬉しい。
グラハム「ごめんなエディ、お姫様抱っこは嫌か？」
エディ「ううん、私今とっても嬉しいから♪」
グラハム「それなら良かった。お、いい場所見つけた！」
スタッ
グラハム「着地完了っと。さぁ、特訓するか」

エディ「うん！」

数分後…

明日人が丁寧に教えてくれたから、私はすぐに太陽炉の熟練度を上げることができた。

エディ「はぁ！トランザム・ソードダンス！」

グラハム「凄いな、もうトランザムソードスキルを使いこなしてる」

エディ「私だってやればできるもん♪」

ドシン…ドシン…

グラハム「ん？何の足音だ？」

エディ「、、、！ぐ、グラハム！後ろ！」

????「がぁぁ！」

グラハム「うわっと!?」

グラハムはすぐさま緊急回避をした。

私が気づけて良かった、、。まさか森からネームドエネミーが出てくるなんて知らなかった。

グラハム「森の奥からなまはげ型のネームドエネミーがくるなんて、危なかったな。エディ、練習通りにすれば大丈夫だからね」
エディ「分かったわ、戦闘開始！」
グラハム「近づいて斬れるか？」
グラハムが試しに接近する。しかし、、
ザンッ！
グラハム「がはっ！い、一撃で体力がレッドゾーンまで減った、、、」
まずい！グラハムを助けなきゃ！
エディ「時間を稼ぐから回復結晶を使って！」
グラハム「あぁ、すまない！」
どうやって倒そうかしら？
グラハム「エディ、トランザムアタックだ！」
まだ慣れてないけどそれしかないわね、、。
エディ「分かった！トランザム！」
グラハム「トランザム！」
グラハムも突撃してくれるならやれる！
２人の猛スピードでなまはげ型ネームドエネミーは混乱しているように見える。混

乱しているうちにグラハムは近接攻撃、エディは射撃を仕掛ける。
エディ「ネームドエネミーの体力ゲージは4本中あと3本、やれるのかしら?」
グラハム「硬いな、なら!」
グラハムはいきなり剣をしまって何かを取り出した。するとその取り出したものからビームの刃が出てきた。
エディ「フォトンソード!?」
グラハム「フォトンソードの二刀流なら!トランザム・レイド!」
グラハムの猛攻がなまはげ型を追い詰めていく。
まさかグラハムがあんな隠し玉を持ってたなんて。
なまはげ型「グルル、、」
エディ「ダウン!今がチャンスよ!」
グラハム「トランザムの限界時間か、けどフォトンソードならやれる!ダブルサーキュラー!」
削り切れるかな?いやだめ、僅かに削れてない!
グラハム「まずい!」
エディ「させない!」
エディが剣先をネームドエネミーに向け射撃し、体力を削り切った。

グラハム「危なかった、ありがとうエディ」
エディ「もう、無理しないでよね♪それより、なんでフォトンソードを持ってるの？」
ＳＡＯにはそんなものないはずだけどなんでグラハムは持ってるんだろう？
グラハム「こう見えて俺、鍛冶スキルも上げてるんだ。だからフォトンソードは自分で作った。エディにもあげるよ」
エディ「凄いわね、ありがとう！」
鍛冶スキルも上げてたんだ！意外だわ。
グラハム「よし、次は砂漠で練習するから移動しよう」
エディ「分かったわ♪」
快晴の空を２人は仲良く飛行した。

第9話「私の恋の話」

あれから数時間、エディはさらに太陽炉を使いこなせるようになった。
グラハム「ふぅ、空中戦の練習疲れたな～」
エディ「そうね。そうだ、クッキー焼いたんだけど食べる？」
グラハム「おぉ！食べたい！」
仮想世界でもたまに料理したくなるのよね～。
エディ「いいよ♪ちょっと待ってね、まだ味見してないから」
そして味見の後は…フフッ♡
パクッ、モグモグ、、、
エディ「うん、美味しい♪グラハムも食べていいよ！」
グラハム「ありがとう！」
エディ「あ、間違えた。グラハムの分はこっち」
グラハム「どっち？」
チュ

グラハム「ンムッ?!、、、」
驚いてる驚いてる♪あ、、明日人の舌に触れた、、！
エディ「ん、、チュ、、んっ、、あん、、」
こ、声が止められない、、、。ダメだって分かってるのに。
エディ「チュ、、チュパ、、、私のクッキー、美味しかった?」
グラハム「あ、あぁ、とっても」
エディ「良かった♪グラハムの為に頑張って作った甲斐があったわ♪さぁまだあるから食べてね！」
グラハム「う、うん。次は普通に食べるよ」
エディ「あら、いくらでも私が食べさせてあげるのに」
グラハム「いや、えと、、口移しはちょっと、、」
エディ「フフ♪いつでもしてあげるわよ♪」
グラハム「う、うん、また今度」
明日人ったら、顔を赤くしちゃって、、私も赤くなってるだろうけど。

数分後…

エディ「さっ、クッキーも食べたしまた空中戦の練習に付き合ってくれる?」
グラハム「もちろん、エディが納得いくまで手伝うよ」
エディ「ありがとう♪」

数時間後…

久しぶりにグラハムと数時間ゲームしたな~。
エディ「かなり戦えるようになったわ!ありがとう!」
グラハム「エディはもっと強くなれる、だから頑張れよ。さぁ、ホームに戻ろう」
もうホームに帰る時間になったのね。また甘えてみようかな。
エディ「うん♪ねぇ、良かったらまたホームまでお姫様抱っこしてくれない?なんだか落ち着くの」
グラハム「そうなんだ。分かった、じゃあ失礼」
グラハムはエディを軽々とお姫様抱っこした。
グラハム「さ、帰ろうか」
エディ「うん!」

ホーム…

もう家に着いちゃったか～。あっという間だったなぁ。
グラハム「到着！エディ、降りていいよ」
エディ「ヤダ、ずっとこうしてもらってたい♪」
グラハム「そ、そうなのか？」
グラハムはホームに入りながら聞いてきた。
エディ「うん、だってなかなかグラハムに抱かれることなんてないもの」
グラハム「それは、、今まで恥ずかしかったから」
エディ「あら、人気のないところを探すときにこうして抱き上げてくれたのはグラハムが始めたことなのに？」
グラハム「そのときのエディは初めて太陽炉を使うから、最初は上手く飛べないかなと思って抱き上げたんだよ」
グラハムは私を降ろしながら応えた。
一応、グラハムなりに何か考えがあったのかな？
エディ「ふ～ん、そういうことだったんだ。えいっ！」
グラハム「おわっ！」

エディはグラハムをソファに押し倒した。
グラハム「え、エディ？これは、、」
エディ「グラハムは本当に優しいよね。ときには私のお願いを断ってもいいのよ？」
グラハム「えぇっと、あまり断らないかな。断れない性格だからってのもあるかもしれないけど、別にできないことを頼まれてる訳じゃないからね」
優しい、、優しすぎる、、、
エディ「そう、それなら良かったけど、嫌だったら断ってね」
グラハム「大丈夫だよ。エディこそ、俺の願いが嫌だったら断ってくれ」
エディ「私も大丈夫。愛してるわ、明日人、、」
グラハム「あぁ、俺もだよ、、」
ギュ…
エディとグラハムはソファの上で抱き合った。
これかも私は優しい明日人の隣に居続けられる♪

翌日…

咲月は今日も部活をしていた。そしてその休憩時間に友達はこんな話をしていた。

女子生徒Ａ「昨日遂に彼氏が出来たの！」
咲月「へ～、良かったね！」
女子生徒Ｂ「おめでとう！」
女子生徒Ａ「ありがとう！それでね、ここだけの話、、いきなりしちゃったの、、／／／」
女子生徒Ｂ「なにを？」
女子生徒Ａ「え、Ｈを、、／／／」
女子生徒Ｂ「ヤバ（笑）」
咲月「ほ、本当に!?」
私もいつか明日人とする時が来るのかな、、？
女子生徒Ａ「そういえば、咲月ちゃんから恋愛の話を聞いたことないけど、好きなタイプの人っていたりするの？」
女子生徒Ｂ「あ～確かに、咲月ちゃんってすっごくモテてるんでしょ？」
咲月「じ、実は、、２週間ほど前から付き合ってる人がいるの」
女子生徒Ａ「そうだったの!?」
女子生徒Ｂ「早く言ってよ～（笑）」
咲月「言うタイミングが無かったから、、」

女子生徒Ｂ「それでどんな人？」
咲月「私の恩人。大げさに聞こえるかもしれないけど、その人がいなきゃ、今の私はいなかったと思うの」
女子生徒Ａ「なんか紳士的な人を想像する！」
女子生徒Ｂ「会ってみたいな～」
咲月「は、恥ずかしいから会わせないけどね／／／」

３０分後…

咲月「ただいま～♪」
明日人「おかえり、今日もお疲れ様」
咲月「ありがとう！」
明日人「早速聞きたいことがあるんだけど、これからＳＡＯで始まるバトルロワイヤルを一緒にやらない？」
咲月「面白そうね、いいわよ！」
明日人「ありがとう！そうと決まれば、ログインするか！」
咲月「私もあとで合流するね！」

ＳＡＯのＰＶＰなんて初めてだからちょっぴり緊張するわ。でもきっと明日人が守ってくれるから、私も明日人を守れる動きをしなきゃ。

第9．5話「強者」

私は明日人に誘われて、ＧＧＯで行われるバトルロワイヤルに参加した。そのバトロワは、太陽炉を装備してないと参加できないみたい。

グラハム「エディ、この装備を使って」

エディ「へぇ、ソレスタルビーイングのパーツをプレイヤー用に発展させたんだ、凄いわね！」

グラハムが改造したことによって、エディの太陽炉から『オリジナル』のＧＮ粒子が出てくるようになっている。

クレハ「鍛冶スキルも上げてたなんて知らなかったわ」

コハル「私もイベントに呼んでもらったのは嬉しいけど、こんな装備貰っちゃっていいの？」

グラハム「皆の為に作った装備だから全然いいよ」

さっき聞いた話だと、このバトロワは1～4人制らしい。

エディ「私はフルセイバーのバックパック装備ね」

コハル「これは、ハルートのバーニアユニットかな」
クレハ「そしてあたしはセラヴィーのＧＮＨＷだったかしらね」
グラハム「その通り！さて、そろそろ出発するか」
装備はそれぞれ自分達のスタイルに合ってるはずだから勝利できるはず！

雪原…

クレハ「うわぁ、ＧＧＯなのに空を飛ぶプレイヤーが多いわね、、」
コハル「スクワッドのバトルロワイヤルか～、私達勝てるかな？」
グラハム「こんな豪勢な装備を使ってるのは俺達だけだろうし大丈夫だろ」
エディ「そうね、できるわよ！」
グラハム「じゃあ、フルブラスト！」
グラハムの戦闘開始の掛け声でエディ達は戦場に飛び込んだ。
エディの所に早速プレイヤー達が襲いかかってきた。
エディ「これは⊠ティアマト⊠の射程内よ！」
エディは対物狙撃ライフルを使って敵を撃つ。
ドォン！

男性A「うっ！」
エディ「一発で倒せなかったみたい。ならもう一発！」
ドヒュン！
エディが撃ち抜こうとした時、隣からGNバズーカでキルを取られた。クレハだ。
クレハ「えいっ！もう1人も！」
エディ「着々と撃破ポイントを取られていく、、、」
クレハ「フフフ♪グラハムに相応しいのはあたしね！」
エディ「そ、そんなことないわ！」
こうなったらクレハのキルも横取りするしかないわね。
ダダダダダ！
キルの横取りを考えていると、下方から攻撃を仕掛けられた。
エディ「きゃっ、アサルトライフルの攻撃よ！」
クレハ「GNフィールド展開！」
???「〇〇〇〇を！」
「おっけ～！」
GNフィールドを展開しているエディとクレハに1つのロケット弾が飛んできた。
エディ「撃ち落とすわ！」

クレハ「任せたわよ！」
エディはロケット弾を外すことなく撃ち落とした。
バンッ！シュウゥ……
エディ「スモークだわ！」
クレハ「ＧＮバズーカでプレイヤーとスモーク共々吹き飛ばすわ！」
バチバチッ…
クレハが撃とうとするがＧＮバズーカからビームがうまく発射されない。
クレハ「やられたわ、粒子ビーム対策って訳ね、、でも私達だって実弾銃が！」
するとスモークの外からアサルト、ミニガンと思われる銃撃が２人を襲う。
クレハ「くっ、ＧＮバズーカが、、」
ドカンッ！
銃弾が数発、２本のＧＮバズーカに命中し、誘爆してしまった。
エディ「これはちょっと不味いかもね。地上に退避するわ！」
クレハ「そうね、その方が良いわ」

第10話「勝つのは」

エディとクレハは敵の攻撃を避けつつ、エディのソードビットで撹乱し、岩陰に退避した。

クレハ「あの人達、凄い連携ね、、、」

エディ「そうだね、、、でも、このままやられる訳にはいかないわ。でも、、、」

エディは落ち込み気味に言った。

エディ「ソードビットが全部壊されちゃった、、、けどまだGNソードⅣがある」

クレハ「GNキャノンⅡは全壊、残る武器はドラケLハブーブだけだわ、、、ん?あれは、、、」

クレハが15m先の丘を見た。エディもつられて視線を向けると、そこにはロケランを構える女性がいた。

????「ダブルキルのチャ~ンス♪」

クレハ「ハブーブの射程距離じゃないわ、、、」

エディ「ここまでか、、、」
諦めたくはないけど、剣だけでは対抗できない。そう思っている間に、女性がロケランを発射した。
ドゴーンッ！
、、、あれ？痛くない。ＨＰも減ってないわ。
爆発の煙が晴れるとすぐに理由が分かった。グラハムのＧＮホルスタービットがエディとクレハを守ったのだ。
????「宙に浮くシールド!?」
女性が油断していると、ＧＮライフルビットにあっという間に囲まれた。
????「しまった！」
そこにグラハムが空から降りてきた。
グラハム「間に合って良かった良かった」
エディ「ありがとう！」
グラハム「さて、倒、、、」
ドカンッドカンッ！
グラハム「なっ!?」
グラハムのライフルビットが破壊され、女性に距離を置かれてしまった。

1「助かったよ～」
2「気をつけて下さい」
???????3「あの人達が最後のチームだよ！私が前に出るから援護よろしくね！」
エディ（あの赤髪の子、フォトンソード使いだわ）
グラハムに言おうとするも、相手のガトリングと二丁拳銃の猛攻が迫り、それどころではない。
グラハム「ホルスタービット！」
ガンッ！ガンッ！ガンッ！
ドカンッドカンッドカンッ！
グラハムのホルスタービットが敵の弾圧に耐え切れず次々撃ち落とされてしまう。
グラハム「このままじゃビットが全滅する。ならハブーブで！」
???3「させない！」
グラハム「フォトンソードの二刀流か！」
不意を突かれ、グラハムの左腕が切られてしまった。
グラハム「くっ、こうなってしまったら弾を全て斬られるのがオチかもな」
そう言ってグラハムはドラケLハブーブをエディに渡し、フォトンソードを取り出した。

エディ（銃弾はあと５００発、行けるかしら。いや、行くしかない！）
グラハム「皆、残り2人は任せたよ！」
エディ「分かった！」
コハル「そうと決まれば、あの2人をグラハムから遠ざけよう！」
クレハ「そうね、妨害させちゃったら一溜まりもない」
グラハム「ホルスタービットも行け」
ヒュンヒュン！
残り6基のホルスタービットがエディ達に着いてきた。
エディ（明日人、気をつけて、、、）
明日人の為に私達はできることをする。
雪原の雪で見えにくかったけど、相手の名前は、、『ストレア』さんと『プレミア』さんね。
エディ「2人共！ストレアさんのロケランには十分注意して！」
クレハ「あ、あの人のことね、分かったわ！」
クレハは、一瞬「誰？」という表情をしていたが、ロケラン持ちというワードですぐに理解したみたい。
コハル「ロケランを破壊するね、シザースビット！」

コハルがシザースビットを射出するも、、、
ストレア「ガトリングも忘れないでね～！」
プレミア「必ず当てます」
ストレアとプレミアの連携により、シザースビット１０基全てが全滅してしまった。
エディ「敵ながらやるわね、、、」
プレミア「炸裂弾を２発撃ち込みます」
バァンバァン！
ドカンッドカンッ！
炸裂弾が撃たれたが、グラハムのホルスタービットがしっかり防御した。しかし、炸裂弾の威力に耐え切れず壊れてしまった。
エディ「壊れた瞬間がチャンスかも、、集中攻撃を！」
クレハ「了解！」
コハル「任せて！」
３人は一斉に射撃する。しかし、ストレアとプレミアのＶＩＴのステータスが高く、体力が最大値の３割しか削れない。
プレミア「そこです！」
バンバンバン！

コハル「うっ、、、！」
エディ「こ、コハル！」
プレミアも、エディ達のリロードの瞬間を狙ってコハルの体に数発命中させた。
クレハ「コハルのＨＰがレッドゾーンに、、、ぐっ！あ、足を止めちゃった、、、」
エディ「残弾がそろそろ不安、、、」
ストレア「これで最後だよ！」
ドンッ！
ストレア「わっ！」
この音はストレアのガトリングの音ではない。彼女の武器が壊されたのだ。弾道は後ろからだったので後ろをふと見ると、グラハムがいた。グラハムは左腕を失っているにも関わらず、ヘカートⅡを使って援護攻撃をする。
ドンッ！
ストレア「そんな！」
続いてロケランも破壊し、体力をレッドゾーンにもっていってくれた。それてグラハムは岩場から降りてきた。
グラハム「皆大丈夫？」
エディ「私はまだトランザムを使えるから大丈夫」

クレハ「あたしとコハルはもうダメかも、、、」
コハル「うん、弾も撃ち尽くしちゃった」
グラハム「そうか、よく耐えたね。後は任せて」
グラハムがいればもう怖いものなしね！

第11話「あと一息」

残り敵人数は眼の前の2人で。てことは私達以外の敵チームは奇跡的に相討ちになったってことかな?

プレミア「あと一息といったところですね。ストレア、私のショットガンを使って下さい」

ストレア「ありがと～!」

プレミアはストレアにショットガンを渡した。

エディ「グラハム、どうする?」

グラハム「どっちにしろ近づかれる、エディは俺のヘカートで後方支援をしてくれ」

エディ「で、でも、グラハムに当たったら、、、」

グラハム「な～に、ヒーリング弾も使ったんだ。一発は耐えられる。それに、いざとなったら俺の体を貫通して相手を撃てばいいよ」

それ、完全にフラグだよね、、、。

エディ「、、、なら、信じてるからね」

グラハム「任せて」

そう言ってグラハムはフォトンソードを取り出した。そして飛行し、相手に急速接近した。

ストレア「つ、突っ込んできた！」

バンッ！

ストレアは撃ち落とす為にショットガンを撃った。

グラハム「おっと、危ない。ごめんな！」

ブン！

ストレア「きゃあ！ぷ、プレミア、ごめん、、」

グラハムはストレアの背中を討ち、ＨＰを０にした。

これで４対１、、と思ったけどクレハとコハルが動けないから２対１ね。

グラハム「あとは、君だけだね」

プレミア「くっ」

バンバンバンッ！

エディ（プレミアさんが乱れ撃ってる！今のところしっかり避けてるけど大丈夫かな？）

グラハム「ヴォーパル、、」

一気に攻めなければ勝てないと見込んだのか、グラハムがソードスキルを発動しよう

とした。
プレミア「させない」
カチャ、、
エディ「撃たせない！」
ドンッ！
エディはグラハムから渡されたヘカートでプレミアを撃った。
プレミア「あぁ、、」
プレミアがよろめく。
グラハム「ストライク！」
これで決められるかな？
プレミア「ハイパーセンス、、、」
グラハム「何!?」
バンバンバンバンバンバンバンバンバンッ！
プレミアはあと少しのところでハイパーセンスを使い、グラハムに数十発の銃弾を撃ち込んだ。
グラハム「エディ、い、今だ、、」
プレミア「しまった」

これがラストチャンスかもしれない、グラハムの頑張りを無駄にしない為にも！
エディ「狙い撃つ！」
ドンッ！
エディの思いが届いたのか、弾がプレミアに命中した。
┣ＶＩＣＴＯＲＹ！┫
クレハ「やったわね！」
コハル「ナイスだったよ！エディちゃん！」
エディ「皆のおかげだよ！」
正直当たるかどうか分からなかったからとても嬉しい！

数分後、総督府にて…

グラハム「最後の最後でやられちゃったよ、、、」
エディ「チームが優勝したのはグラハムが奮闘してくれたおかげだったわ、ありがとう♪」
グラハム「いや、エディが最後までサポートしてくれたからだよ」
エディ「そんな、私にはもっと何かできたはずなのに、、、」

ストレア「あ、いた～！」
話していると、ストレア達が声をかけてきた。
グラハム「やぁ、レインとストレア、プレミア」
ストレア「当ったり～♪そんな君にはムギュ～してあげる♪」
ギュ～
ストレアは皆がいるにも関わらず、グラハムを抱きしめた。
グラハム「す、ストレア！皆が見てるから！」
エディ「ムッ、、、」
クレハ「ムッ、、、」
コハル「ムッ、、、」
３人がグラハムに鋭い視線を送っている時、レインが話した。
レイン「グラハム君、あの時は斬らないでくれてありがとうね」
え？あの時トドメをさしたんじゃないの？
エディ「、、、グラハム？斬らなかったの？」
グラハム「は、はい、、、」
クレハ「レインが可愛かったから？」
レイン「！な、何を、、、」

グラハム「女の子をあまり斬りたくなかったからね」
グラハムらしいというか、なんというか、、、。
コハル「グラハムっていつも周りに女の子がいるよね、、、」
エディ「確かにそうね」
プレミア「これも〒愛〒と言うのでしょうか？」
プレミアさんいきなり何を言い出すの!?
エディ「違うから！」
クレハ「違うから！」
コハル「違うよ！」
グラハム「声を揃えて言われると傷つくんだけど！」
レイン「フフ♪皆グラハム君の事が好きなんだね」
ストレア「そう言ってるけど、今回の戦いでレインもグラハムの事が好きになったでしょ～？」
レイン「え、ええ!?」
ストレア「顔に出てるもん♪」
また明日人が気になってる人達が増えた、、、。
レイン「そ、そんなことより、ストレアちゃんはいつまでグラハム君にくっついてる

の！」
ストレア「だって私はグラハムの事が大好きだも～ん♪」
エディ（きっぱり言うのね、、）
グラハム「え、えっと、俺達実際に会うのは初めてだよな？そんなにくっつかれると恥ずかしいんだけど、、それに、俺は好かれるようなことをしたかな？」
ストレア「んーと、皆に優しくしてるからかな」
グラハム「へぇ、、」
ストレア「レインから聞いたよ？ＨＰは０にしなかったって」
バトロワなんだからトドメをさしなさいよ、、と思ったけれど、もう過ぎたことだからいっか。
レイン「それじゃあ、私リアルで事情があるから落ちるね！」
ストレア「私ももう行くよ。バイバ～イ♪」
グラハム「あぁ、またな」
こうしてバトロワイベントは幕を閉じた。

第3章　再び彼を壊される

第12話「とある日の私達」

今日もグラハムとエディはＧＧＯをプレイしている。
ホームを出ると、そこにはクレハがいた。
クレハ「グラハム～！」
グラハム「やぁ、クレハ」
ムギュ！
するとクレハはグラハムに飛びついた。
私の明日人にそんなにくっつかないで、、、。
グラハム「わっ！」
クレハ「ナイスキャッチ♪」
グラハム「避ける訳にはいかないからね」
明日人の体に胸が当たってるじゃない！早く離さなきゃ。
エディ「早々グラハムにくっつきすぎ！」
クレハ「あら、嫉妬してるわね」

エディ「、、、してるから離れて！」
つい嫉妬してることを認めてしまった、、。
クレハ「おっと、そんなことより」
クレハはグラハムに抱きつきながら話した。
クレハ「今回の大型アプデ、宇宙に行けるみたいよ！」
グラハム「そうなのか？だとしたら宇宙服をゲットしないといけないのかな？」
クレハ「どうなのかしらね。明日にならないと分からないわ」
エディ「楽しみだね♪」
グラハム「あぁ、楽しみだ」
エディ「明日の為にレベル上げに行こ！」
クレハから明日人を引き離す為に、グラハムの手を繋いで総督府に向かう。
クレハ「ちょっと、あたしも忘れないでよね！」
クレハもグラハムと手を繋いだ。
もうちょっと身を控えなさいよ！
グラハム「こんな人目に付く場所で手を繋がれると恥ずかしいんだけど」
エディ「異論は認めない♪、！ちょっと、それ私のセリフよ！」
クレハ「異論は認めない！、！ちょっと、それあたしのセリフ！」

なんでこんなにセリフが被るの?!

ダンジョン内…

グラハムが紹介してくれたクエストは、珍しいエネミーが結構な頻度でスポーンし、レベル上げがはかどっている。

グラハム「各自ボス部屋に侵入後、散開！」

エディ「ＯＫ！」

クレハ「ＯＫ！」

今日の明日人はいつも以上に元気ね、この後何もなければいいけど、、。

ギィ、、、

グラハム「フルブラスト！」

相手は【コープススニファー】の改良版ね。私、あいつ苦手なのよね。でもグラハムとカバーし合えばいけるはず！

グラハム「行け、ライフルビット！」

パシュンパシュンパシュン！

グラハムがライフルビットを射出する。しかし、ＨＰはあまり減っていないように見

える。
エディ「堅い、、なら！フルセイバーアタック！」
ザンッ！
エディ「クリティカルが入りやすい、、」
グラハム「ナイス！行け、ライフルビット！」
パシュパシュパシュパシュ！
やはりグラハムのライフルビットではＨＰがあまり減らない。
グラハム「なんだか光学武器はイマイチだな」
クレハ「実弾とかの方が効果的なのかしら」
エディ「有り得るわね」
クレハ「！ミサイルが来るわよ！」
グラハム「ふっ！」
その時、グラハムがいきなり後方へバク宙し、ミサイルを回避した。
エディ「ハイパーセンスなしで避けたの!?」
グラハム「人呼んで、グラハムスペシャルだ！」
そして３人は実弾武器でコープススニファーにダメージを与え続ける。すると、コープススニファーから煙が出てきた。

クレハ「体力がレッドゾーンになったわ！今よ！」
グラハム「結構早かったな、これで終わりだ！」
グラハムがラストアタックを仕掛けようとすると、コープススニファーの銃口から光が漏れる。
エディ「まずい、、、最後のレーザーに気をつけて！」
グラハム「なっ、ホルスタービット！」
グラハムはギリギリ防御に成功した。エディが声をかけていなければ最後の最後でダウンしていただろう。
グラハム「目標を狙い撃つ！」
ドォンッ！
グラハムの弾丸はしっかりとコープススニファーの頭を撃ち抜き、倒すことに成功した。
グラハム「ふぅ、ナイスファイト」
エディ「お疲れ様！」
クレハ「さすがね」
グラハム「これでレベルが結構上がったから、宇宙アプデに対応できるはず」
エディ「そうね♪それじゃあ、ホームに戻って休みましょ！」

グラハムのホーム…

グラハムは椅子に座ってステータスの振り分け、クレハはお風呂に入りに行った。
やっと明日人との２人の時間ができた、、、甘えようかしら。
エディはドレス・オブ・サンシャインに着替えて、グラハムに抱きつく。
グラハム「ん？エディ、どうしたの？」
エディ「今日はクレハとよく話してたわね」
グラハム「言われてみれば、、、」
エディ「寂しいな、、（ボソッ）」
ギュ…
エディ「！」
甘える発言をすると、グラハムが強く抱き返してきた。
グラハム「ごめんな、寂しかったよな、、、」
エディ「エヘヘ♪初めて抱いてくれたね」
グラハム「そうだっけ？」
折角抱いてくれたんだから気持ちを返さなくちゃ♪

エディ「抱いてくれたお礼は、、」
グラハム「いやいや、これくらいでお礼なんていらないよ」
エディ「あら、それなら、、」
チュ
グラハム「む、、」
エディ「ん、、チュ、んふぁ、、」
グラハム「、、」
声を出すのをこらえてるみたい。
エディ「チュ、ふぁぁ、、グラハムは舌入れてこないの？」
グラハム「さらっと問題発言しないでよ、、まぁその、俺、キス下手だから」
エディ「私だってやったことないんだからね。でも、以前も2人でキスしたんだし慣れたでしょ？」
グラハム「慣れちゃった、かな」
まだ不安そう、、？この私がもっと慣らしてあげなきゃ♡
エディ「じゃあ、今グラハムからキスしてよ♪」
グラハム「え、ええ。嫌って訳じゃないけどそれは、、」
エディ「もう、勇気がないのね。私は全然嫌じゃないからいつでもきて♪」

グラハム「う、うん。じゃあ、いくよ、、」
チュ…
エディ「♪」
フフッ♪遂に明日人からキスしてもらえた♪
グラハム「、、、ん」
珍しくグラハムからほんの少し声が出た。
エディ「ん、、チュ、チュ、、フフフ♪良く出来ました♪」
グラハム「そ、そうかな？」
エディ「うん！それじゃあもうちょっとだけ、、、」
グラハム「！く、クレハが帰ってくる」
ドアが開く直前に、エディはグラハムの傍を離れた。
危ない危ない、見られるところだった。
ウィーン
クレハ「ふぅ、温かかった」
グラハム「！」
クレハはなんと、バスタオルを体に巻いたまま出てきた。
エディ「く、クレハ！何よその姿！」

クレハ「これもグラハムの為よ♪」
エディ（いやいや！意味わからない！）
エディ「あなたねぇ、、、あ、いけない！部活に行かなきゃ！グラハムに変なことしたら、2人共許さないからね！」
グラハム「え、おれｍ・・・」
クレハ「大丈夫よ、私が変なことすると思う？」
エディ（思うから警告してるのよ）
クレハ「とにかく、エディも気をつけて」
エディ「気遣いありがとう。またね」
エディはログアウトした。

咲月の部屋…

咲月「はぁ、、、本当に大丈夫かしら」
そう思いながら、部活へ行く準備をする咲月であった。

第13話「皆と外食」

学校で部活動中…

今日も咲月は友達と話しながら部活をしていた。
女子生徒Ｂ「あんた最近ラブラブ生活どうなの?」
女子生徒Ａ「今それ聞く!?、、、もし結婚したら?って話してた、、、」
エディ「展開が早すぎるわよ」
エディは微笑しながら答えた。

数時間後…

咲月はいつも通りの流れで明日人が待つ家に帰宅した。
咲月「ただいま～」
明日人「おかえり。今日も部活お疲れ様」

咲月「ありがとう♪ねぇ、今から青クマ達と出かけない？」
明日人「うん、いいよ」

仮想世界、パーティロイヤル…

ログインすると、すぐにピンクマと青クマのいるロビーへ合流した。
青クマ「よぉ～、グラハム、調子はどう？」
グラハム「良好かな」
ピンクマ「バー行こうよ！」
グラハム「未成年なんだが」
ピンクマ「大丈夫でしょ。、、、多分」
青クマ「酔わない酔わない、、、多分」
グラハム「その多分が不安なんだけど。エディもそう思うだろ？」
バーね、、、一度は行ってみたいと思ってたのよね。
エディ「行こう。バーに」
グラハム「行くのか、、」
エディ「いくらＶＲＭＭＯといえど、酔いまで再現されてないでしょ」

グラハム「、、、そうだよね。じゃあ行こっか！」
青クマ「わ～い！」
ピンクマ「じゃあ奢りはグラハムさんな」
グラハム「え？」
金欠になっちゃうんだろうなぁ。

バー…

エディ達４人は入店し、木材で作られたカウンターに店員ＮＰＣから見て左から、ピンクマ、グラハム、エディ、青クマの順に座っている。
ピンクマ「バーなんて久しぶりに来たな～」
グラハム「、、、？そういえばピンクマ、お前何ｓ」
青クマ「グラハム、女性に聞いちゃいけないことは沢山あるんだよ？」
グラハム「えっ、あっ、わ、悪かった」
エディ（きっと年齢を聞こうとしたわね）
青クマ「エディは何食べる？」
エディ「そうね、、このカプレーゼってものを頼もうかしら」

青クマ「大人の女性って感じでかっこいい！」
エディ「え？そ、そうかな？」
青クマ「うんうん！だよねグラハム！」
グラハム「ん？」
青クマがグラハムに話しかけると、ピンクマもグラハムをちら見した。
被り物をしているから実際は分からないけど、ニヤニヤしているように感じる。
グラハム（まさかこいつら、咲月にいい感じの言葉をかけろと言ってるのか？いやそもそもカプレーゼを頼む人に対して何言えばいいんだよ、、）
グラハムは考え事をしていたからか、しばらくしてから口を開いた。
グラハム「え～っと、そうだな、俺の自慢の魅力的な女性だ」
（こんなんで咲月が喜んでくれたりしないよな、、）
エディ「！」
エディはグラハムの言葉で頬を赤らめた。
エディ「そ、そんなことないよ！は、恥ずかしい！」
エディは恥ずかしさのあまり、近くにあった飲み物を一気飲みした。
青クマ「あ、私のお酒、、」
エディ「あ、飲んじゃった、、」

ピンクマ「大丈夫大丈夫」
グラハム「適当だなぁ」
その後、エディ達は注文した料理を食べて店を出た。

グラハムのホーム…

エディ「ただいま～」
????「んっ、、、」
エディ「？誰の声かしら。あの部屋から？」
エディは声のした部屋の自動ドアを開いた。
????「そ、そこはぁ、、、」
エディ「！」
そこには、グラハムとクレハがとんでもないことをしていた。
クレハ「ごめんねエディ、グラハムはあたしのものになっちゃった♡」
エディ「そ、そんなのダメ、、、！」

エディ「ん、、、」
目を覚ますと、そこはグラハムの部屋でエディは布団をかぶっている。どうやらクレハ達との出来事は夢のようだ。
夢で良かった、、、。
今グラハムのホームにいるが、何故だか店を出た所から記憶がない。
エディ「あれ、私、寝ちゃってた。って、なんで下着姿!?」
エディは急いでコート・オブ・サンシャインに着替えた。
私何でこんな格好してたんだろう?

第１４話「戦い」

そういえば、私が眠っている間に明日人は何処へ行ったんだろ？
エディ「そういえば、明日人は、、、！」
独り言が終わる前にエディは明らかな異常を発見した。玄関に血が溜まっていたのだ。
エディ「どうして？、、まさか！」
エディはすぐさまグラハムのログイン状況を確認した。
エディ「まだログインしてて、戦闘中？なんだか急いで明日人の所に行かないといけない気がする」
エディは不安を抱きながらグラハムのいる場所へ急いで向かう。だが、肝心な戦闘場所が分からない。
エディ「一体何処に、、、！あれを辿れば、、、」
エディは所々に血が落ちているのを目にした。安全圏なので何故血が落ちているのかは分からないが、今はそれを考えている暇はない。すぐに太陽炉を起動させ、グラハ

ムがいるであろう場所へ向かう。
進むにつれ血と血の間隔がどんどんあいていくけど、この感じだとこのまま真っ直ぐ向かえばいいかな。

オールドサウス、都市の外れ…

ホームから真っ直ぐ飛行していると、都市から外れた場所でプレイヤー同士が戦っているのを目撃した。
エディ「あのＧＮ粒子は、、、」
エディはバレないように、ビルの影から双眼鏡で様子を伺った。
エディ「間違いない、明日人だ。でもなんであんな死にものぐるいで戦ってるのかしら」
玄関の血溜まり、、、明日人の必死さ、、、もしかして、あいつが明日人の命を狙っているの？
そう考えていると、グラハムが地に膝をつき、防戦一方の状況になってしまっている。
エディ（明日人を助ける為に、練習してる【吟唱スキル】を使うしかない。有効範囲内でありますように）

エディがすぅ、、、と息を吸い、呼吸を整えると【Ｌｏｎｇｉｎｇ】を歌い始めた。
エディ「手に入れるよきっと……」
歌い始めると同時にグラハムが立ち上がり、ステータスが上昇しているのが確認できる。そしてグラハムがソードスキルを放った後、システムウィンドウを開き、なにかを操作している。
エディ（ここからじゃ何をしているのか分からない。けど、だからって歌を止めて駆け寄るのはダメな気がする）
激しい戦闘が続き、接近戦に持ちかけた時、２人は赤く輝き出した。トランザムだ。２つのトランザムがぶつかり合い、砂煙が舞い上がる。
エディ「明日、、っ！」
歌を止め愛人の名を呼ぼうとするが、とある人影が声を止めた。その人影は、エディから数１０ｍ程離れたビルの２階に存在し、ＧＧＯでは見ることのない『赤紫色のシステムウィンドウ』を操作しながら、明日人の戦闘を監視していた。
エディ「共犯者？」
そう考え、エディはスナイパーライフルを取り出そうとしたが、システムウィンドウが閉じ影が消えた。
エディ「何をしていたのかしら、、今はそれより明日人のもとに行かなきゃ」

エディはさっとビルの影から体を出し、倒れ込んでいるグラハムのもとへ駆け寄った。

エディ「明日、人、、、」

グラハムの現状は目に光がなく、血まみれで、胴体には穴が空いている。その姿を見たエディは涙を流している。

グラハム「咲月、、ごめんな、、入院してしまう、かもしれないから、傍から、、離れて、しまう、、」

仮想世界なのに言葉が詰まりながら話すってことは、本当に戦ってた相手は犯罪者だったのね。

エディ「嫌だよ、死なないで明日人、、私を1人にしないで、、」

グラハムはエディが話した後何かを伝えようとしたが、システムが異常を検知し、グラハムを強制ログアウトさせた。

エディ「、、急いで病院に連れて行かなきゃ」

エディは迅速にログアウトし、グラハムを病院へ連れて行く準備をした。

第15話「大丈夫?」

明日人の部屋…

咲月はＧＧＯからすぐさまログアウトし、明日人の部屋へ向かう。
咲月「大丈夫なのかな、、、？」
容態そこには息苦しくしている明日人が床に倒れていた。恐らく自ら動こうとしたのだろう。
明日人「はぁ、はぁ、、、」
咲月「明日人、無理しないで!救急車を呼ぶから!」
咲月はスマホを取り出し、救急車を呼んだ。

病院…

救急車が病院へ着くと、救急隊員達は急いで手術室へ向かった。１人の医師が言うには明日人の身体は衰弱していて、放っておくと意識不明の重体になるらしい。

咲月（手術が成功しますように、、、）

明日人が手術室に入って約３０分後、手術中のランプが消灯し、医者達が出てきた。

その内１人が咲月に説明した。

医者「手術は無事成功しました。これから病室に移します。こちらへ」

咲月「はい」

良かった、無事に手術は成功したみたい。どんな手術方法かは想像がつかないけど。

病室…

医者「それでは、５分後に戻って来ます。その間明日人君に呼びかけてみるのもいいかもしれません」

咲月「分かりました」

医者が部屋を出た後、咲月は明日人の手を握り話しかけた。しかし、その日は明日人が目覚めることはなかった。

数日後、学校にて…

４限目の授業が終わり、昼休みに突入した。
咲月「はぁ、、、」
小春「咲月ちゃん、一緒にお昼どう?」
咲月が落ち込んでいると、小春が来た。
咲月「小春、、いいよ」
小春「明日人のことで元気がなくなる気持ちは分かるけど、気持ちを切り替えなきゃ。明日人も咲月ちゃんに笑顔のままでいてほしいと思ってるよ」
咲月「、、、そうだよね、ごめんね、暗くなってて」
小春「いいよ、また何かあれば話聞くからね」
咲月「ありがとう」
小春の言葉で咲月は少し明るくなった。

授業が終わり、病院…

今日も咲月は明日人の様子を見に病院へ向かった。今日こそ目を覚ましてくれないかなと思いながら病室の扉を開けた。
咲月「今日も来たよ、明日人」

病室には明日人がポツンと1人で眠っている。明日人が入院してから5日、初日よりも明日人の体が痩せてしまっている。咲月は荷物を椅子に置くと、明日人の痩せた手を握った。

咲月「明日人、お願いだから起きて、、、私を1人にしないでよ、、」

その時、咲月の手が優しく握り返された。

咲月「！」

驚いた咲月はさっと明日人の顔を見た。目が開いている。

明日人「やぁ、咲月、、」

咲月「、、、明日人！」

5日ぶりに明日人の声を聞き、今まで抑え込んでいた気持ちを全て出すかのように、泣きながら明日人に抱きついた。

咲月「良かったよ、、明日人が死なないで、、」

明日人「心配、かけて、ごめんな、、」

咲月「まだ喋らない方がいいよ。手術したんだから、、」

明日人「因みに俺、どのくらい、寝てた、、？」

咲月「眠っていた時間は、、、5日よ」

明日人「5日も、、」

さすがに信じ難いよね、、でも事実。
コンコン
病室にノックが響く。
そういえば今日は小春も来るって言ってたな。
咲月「どうぞ」
ガラガラ…
小春「こんにちは」
予想通り、入室してきたのは小春であった。
明日人「小春、、」
小春「明日人！良かった、目が覚めたんだね」
明日人「あぁ、なんとか、ね、、」
小春「、、、」
ギュ
小春はそっと明日人を抱きしめた。
小春「無理して話さなくてもいいよ」
明日人「、、、うん
小春「咲月ちゃんから聞いたんだ。明日人が命をかけて戦ったんだって」

明日人は頷いた。
ガラッ
その時、病院の先生が病室の扉を開けた。
先生「お、明日人君！気がつきましたか！」
明日人「はい、、5日も眠っていたみたい、ですね」
先生「眠っていた期間は聞いたんですね。じゃあ、私からは体の状態について話します。お2人は病室の外で待っていて下さい」
咲月「はい」
私も話を聞きたいのに。

数分後…

明日人と先生の話が終わり、咲月と小春は再び病室に入る。しかし再び病室に入ったものの、面会時間が終わりに近づいていた。
咲月「面会時間がもう終わっちゃう。そろそろ帰るね」
明日人「分かった、帰り道に気をつけて。小春もね」
小春「うん、ありがとう。だんだんスムーズに話せるようになってるね」

明日人「そうだな、すぐに声は完治しそう」
小春「良かった♪じゃあまたね」
明日人「あぁ、また明日」
咲月も小春の後にまたねと言い、病院をあとにした。

リビング…

咲月「そういえば、明日人っていつ退院なのかな?」
ガチャ
咲月が独り言を言っていると、玄関の扉が開く音がした。
咲月「お母さん達かな?おかえり、、、!」
玄関に目線を向けると、そこには親ではなく明日人がいた。
明日人「俺だよ、咲月」
咲月「あ、明日人!?帰ってこれたの!?」
明日人「許可をもらったからね。身体中が痛いけど安心して」
咲月「退院できて良かったね、、グスッ、、」
明日人「泣かないでよ」

咲月「うぅ、、グスッ、、」
咲月は明日人が無事で本当に良かった為、なかなか泣き止まない。
でも切り替えなきゃ。
咲月「とにかく、今日は部屋で休んでね！」
明日人「そうさせてもらうよ」
咲月「、、、明日人」
チュ
明日人「ん、、、」
咲月は自分の寂しさを埋めるように、明日人にキスをした。
咲月「大好き、、、」
明日人「俺もだよ、、、」
明日人はそう言うと、咲月の頭に手を置いた。